

岡崎市議会議長 様

支出番号	1
------	---

会派名 自民清風会  
代表者名 中根 武彦

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政務活動報告書

令和6年1月18日提出

活動年月日	令和5年4月24日（月）～26日（水）	
氏名	加藤義幸 小木曾智洋 鈴木静男 磯部亮次 廣重 敦 酒井正一	
用務先 及び 内容	1	用務先 福岡県 うきは市
	4月24日	内容 道の駅を中心とした観光地づくりについて
	2	用務先 長崎県 島原市
	4月25日	内容 歴史めぐり観光について
	3	用務先 佐賀県 嬉野市
	4月26日	内容 嬉野温泉駅周辺整備について
	4	用務先
	月 日	内容
備考		

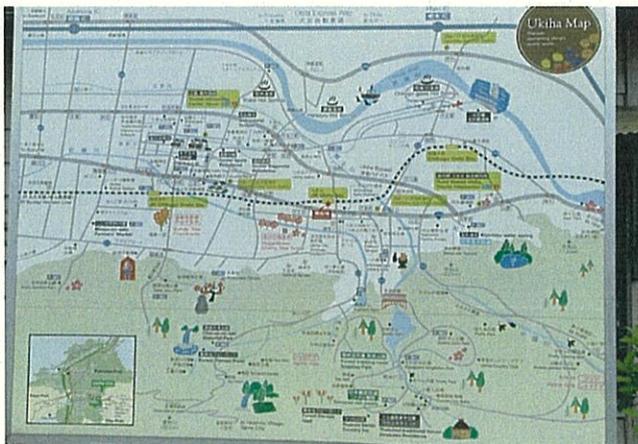
# 政策調査視察調査報告書

視察日	令和5年4月24日(月)	視察地	福岡県うきは市
視察内容	道の駅を中心とした観光地づくりについて		
視察者	加藤義幸、鈴木静男、小木曾智洋、磯部亮次、廣重敦、酒井正一		



## 【うきは市】

福岡県の南部に位置し、久留米市、朝倉市、八女市、大分県日田市に隣接し、面積 117.4 ㎏、人口 27,089 人 (2023 年 3 月 1 日現在) 経済的には久留米市、朝倉市との関係が強く、両市への通勤通学人口が多い。2018 年 10 月にタレントのタモリ氏が観光大使に就任した。



## 【道の駅うきは】

うきは市を代表する観光名所となっており、柿・梨・ぶどう・いちご・桃などの果樹栽培が盛んであり、これら四季折々の果樹を販売し、果物の売り上げが全体の 5 割を占めている。また、『うきは市の素晴らしさ、ゆとりとやすらぎのある』を都心から訪れた人達に広く紹介し、観光や農業体験の機会を与える情報発信地として整備された。そして 2021 年には防災と災害支援拠点としての「防災道の駅」に福岡県内で唯一選定されている。



### 【取り組み】

うきはの里株式会社が指定管理者として管理運営を行っており、営業推進部を立ち上げ、地域総合商社としての機能を持たせ、商品開発や観光にも着手している。

『都心と農村との交流拠点』として、農林業・商工業・観光業がひとつになって『うきはブランド』の研究・開発を実践する場として整備されている。国土交通省では、「道の駅」第3ステージと位置付け、「地方創生・観光を加速する拠点へ」進化するため、「道の駅」を核にした地方創生」及び「道の駅」の持続可能な安定運営」を目指している。

### 【今後】

高齢者や女性の活動の場として、さらには地域創生拠点として地域福祉や産業振興、地域文化・観光情報の発信の場として関係機関と連携していく事や新規のファン獲得やリピーターを飽きさせない様に、観光客向けの情報発信、新型コロナウイルス感染症により中止していたイベント企画などを行っていくとの事。

「道の駅うきは」は、大変景色がよく自然に囲まれた場所に位置しており、グリーンツーリズムに力をいれ、地元の果樹園での収穫体験や加工体験、地元の食材を使った料理教室やバーベキュー、自然散策やサイクリングなどを行っている。また果物の旬ごとに、リピーターが訪れるとの事。本市の道の駅とは、立地環境や客層など大きく条件が異なるが、「この商品があるから行きたい。」となるよう商品開発等の継続をしていくことが大事と考える。

### 【同行者の所感】

・うきは市は、「水とフルーツとスイーツのまち」として売り出しており、農業産出額に占める果実（フルーツ）の割合が高く全国平均9%に対し、うきは市は34%も占めている。1年中フルーツが栽培され、種類も豊富で糖度もかなり高いらしい。フルーツのまちをPRするとともにそのフルーツを使ったスイーツのまちとしてもPRを展開している。人口10万人あたりの洋菓子店数は21大都市中1位の神戸市16.4店舗に対し、うきは市は10倍近い142.9店舗もが軒を連ねており、集客力も安定しており、フルーツ栽培農家の支えの一つになっているようだ。道の駅においてもその特色を生かし開業当初は4億7500万円であった総売上高が20年後の令和元年度には10億円を突破している。開業後20年が過ぎてもいまだに右肩上がり売上高が推移しているのは特筆すべきである。右肩上がり推移

しているにも関わらず、次のステージも考えており、道の駅周辺の取組を強化しており、観光情報施設の整備、交流体験ができるイベントスペースも兼ね備える。マリオット系列のホテル進出も決定しており、令和5年秋には開業する予定だ。これからは、滞在型観光地づくりにも力をいれ、観光客増に期待が高まっている。

やはり、地域の特性を活かしきったブランド力は、うきは市の絶対的な強みであろう。本市に於いても、未来に期待の持てる、農業施策等の展開、観光行政の展開をすべきと考える。

- ・「道の駅うきは」は、平成12年4月に開設され、今年で23年目を迎える施設であり、今となっては普通の施設ではあるが、令和4年度で売り上げが施設開業から2.5倍の12億円を達成して年々売り上げを伸ばしてきている。また、コロナ禍においても売り上げを伸ばしていることには驚きである。

また、九州じゃらん道の駅ランキングで2016年から7年連続で「1位」と大変評価されている。

大都市福岡市から車で1時間とのことで、うきは市自体が吉井町の白壁町並みであり1年中フルーツが栽培され、道の駅で四季折々のフルーツが販売され、都会からの観光客に安くて美味しいと好評で年間を通じリピーターが多く訪れている。福岡市等からの手軽な移動距離である地理的優位性を活かして、新鮮で安くて美味しいフルーツを提供できる特徴をブランド化している。

地域の特色を最大限活用したブランド化事業の成功例であり参考にするべき事例である。

平成31年にDMO法人を新たに設立して着地型観光等を目指し地域の稼ぐ力を引き出し、観光経営の視点に立った観光地域づくりをすることとすることで、今後の動向を注視していきたい。2023年夏に「道の駅うきは」に隣接する形でマリオット系列のホテルが、宿泊特化型のホテルを開業し、宿泊者の食事やお土産などは道の駅や地域のお店を利用することにより交流や往来を促す地方創生事業が展開される。このプロジェクトが成功することを祈り、今後の展開に期待したい。

- ・先ずは、うきは市の道の駅事業は、目的地としての道の駅であることを目指した事業の立派な成功例であると考え。うきは道の駅そのものは、産直があって、レストランがあって、案内所があってと、どこにでもある、本市の道の駅藤川宿と何ら代り映えの無い普通の道の駅の体である。にも拘わらず、年間売り上げ12億、年間レジ通過者60万人を誇る。これは、うきは市がフルーツに強く、産直品もフルーツに特に力を入れており、一年を通し、多種多様なフルーツが売られている。産直品販売は道の駅だけでなく、周辺近隣にも複数存在し、売り上げも至って順調であるらしい。うきは市のように、他の追随を許さない位の差別化を図る事が重要である。更には、フルーツがPRされることによって浮羽地区の隣、吉井地区ではフルーツを使用したスイーツ店が数多くオープンしている様である。今回は道の駅での事例を学ばせて頂いたが、この事例は道の駅に限った事ではなく、客の求めるものに対し、他との明確な差別化が図られれば、又、一朝一夕で真似の出来ない事を地道に推し進めて行くことが大切であると感じた。

- ・うきは市は水に恵まれたところで、全国792市で唯一上水道が無い天然の地下水のまちだそう。名水百選、水源の森百選、疎水百選、名湯百選など、水に纏わる百選に多数選定

されている。そのような土地を背景に農業の特性として、フルーツの出荷額が多く、農業出荷額の34%を占めるそうだ。ぶどう、桃、梨、柿、ミカン、イチゴ、リンゴ、キウイ、ブルーベリーなど生産し、それぞれ多品種を扱っている。

そのため、地元産のフルーツを求めて、スイーツ店の出店が相次いだ。結果として、人口27000人余りのところに42店舗が存在するような状況になっている。人口比率で言うと、10万人当たり、16.4店舗の大都市圏では1位を誇る神戸市よりはるかに多い142.9店舗というような数字がはじき出される。

結果安近短観光による、フルーツを求めて来市する福岡を始めとする、近隣都市からの交流人口が増加し、安定をしている状況を生み出している。

平成12年にオープンした、「道の駅うきは」もフルーツを多数取り揃え、売り上げを伸ばしている。開設時4億7千万円程の売上は20年間で、11億2500万円程に伸びている。(道の駅藤川宿の売上は6億円程)

来場者はレジ通過人数が年間57万人程。結果として、来場者は年間120万人程度と計算される。

更に、地域福祉の拠点として「重点道の駅」、「防災道の駅」に選定されるなど、道の駅の存在に重みが増している。

市としては、DMOを設立し、道の駅を核とする、着地型観光商品の開発に取り組んでいる。道の駅内に贈答品コーナーを整備したり、観光情報施設ウキハコを整備し、レンタサイクルを配置したり、令和5年秋には、積水ハウスとマリオットホテルの共同プロジェクトである「フェアフィールド・パイ・マリオット」ホテルが道の駅の横に開業する。

小さな自治体であるが、大きな成果を上げていると敬服した。何よりも「うきはフルーツ」のブランド化に成功し、そのことを武器に、出荷して、他市へ販売することだけでなく、観光客の誘致に繋がっていることが素晴らしい。本市の額田におけるブランド化の取り組みにも大いに参考になるものである。今後の動向にも注目していきたい。

・まず、上水道が無い天然地下水のまちというところにおどろき。

水に恵まれ、水にまつわる日本百選に多数選定されている「水のまち」ということは、九州三大麺どころと呼ばれ、地元磯乃澤という数多くの受賞歴を抱える酒蔵を有することからも納得。

ただ、今では農業産出額の3分の1をフルーツが占める「フルーツの里」として知られ、一年中フルーツ狩りが楽しめるのが強み。

道の駅うきはは、2000年にグリーンツーリズムの一環として開業し、20年後に売り上げ10億円を達成し、コロナ禍も下がることなく、昨年度の売り上げは12億円。この成功に一年を通して提供できるフルーツが貢献している。

平成27年にうきはブランド推進課を行政組織内に創設し、ブランド戦略係が道の駅を所管。同年、国交省が重点道の駅に選定し、地域福祉の拠点に。

令和3年には、国交省が防災道の駅に選定し、大災害時に自衛隊や警察などの救援、復旧、復興活動の拠点になるよう、地域防災計画に基づき整備を推進中。

このように、行政が道の駅を人、モノ、情報が集まる場所として戦略的に整備しているところが面白い。

ここに今年の夏、マリオット系列のホテルが進出することで、名実ともに観光における核になるうとしていく。

道の駅をどのように位置付け、どういう人たちを絡めて、どのようにするか、岡崎市としても一度整理する必要があると思う。

ただ、果物生産者が道の駅に提供する分はあまり利益につながらない（果物狩りが一番儲かる）というところが、後々問題とならないか、気になるところである。

# 政策調査視察調査報告書

報告者：廣重敦

視察日	令和5年4月25日(火)	視察地	長崎県島原市
視察内容	歴史めぐり観光について		
視察者	小木曾智洋、加藤義幸、鈴木静男、磯部亮次、酒井正一、廣重敦		

視察目的：昭和32年全国初の城跡公園に指定された島原城中心に城下をめぐる歴史散策コースを展開している島原市を訪問し、武家屋敷等岡崎市には無い歴史的建築物をはじめ、この地域の強みである湧水を観光客の回遊にどのように取り込んでいるのか。

どうする家康をきっかけに観光客の定着を狙う本市として、その取り組みを学ぶ。

開催場所：島原城、四明荘、清流亭、大三東駅、他

説明者：議会事務局 野中主査、森川氏、しまばら観光課 田中氏



タイトル：『島原市の歴史めぐり観光について』

## 1. 島原市の概要

- ・長崎県南東部の島原半島の東端に位置し、半島の約18%を占める島原半島の中心都市。
- ・面積は82.96km<sup>2</sup>、令和5年3月末時点での人口42,765人、世帯数は19,719世帯。
- ・江戸初期に松倉重政が島原城を築城したことで都市基盤が形成され、以来、松平七万石の城下町として島原半島一円の政治、経済、文化の中心的な役割を果たしてきた。
- ・市の西部には標高1,483mの平成新山をはじめとする雲仙岳の山々があり、東向きに裾野がひろがるが、雲仙普賢岳の噴火により大きな災害も経験してきている。
- ・昭和15年に全国で159番目、県下で3番目の市制施行。
- ・昭和30年に三会村を、平成18年に有明町を編入合併。

## 2. 鯉の泳ぐまち

島原には至る所に湧水があり、「島原湧水群」として日本名水百選に指定されている。

### ① 観光交流センター「清流亭」…右写真

- ・市内周遊観光の拠点としての機能を持ち、島原らしさを持つ「島原スペシャルクオリティ商品」を展示すると共に観光情報提供を行っている。
- ・敷地内には、豊富な湧水を利用した池があり、色とりどりの錦鯉が泳ぐ。
- ・水と緑に囲まれ、水車がお出迎えするゆったりした風情があり、まず訪れる場所としてよくできている。



## ② 湧水庭園「四明荘」…右写真

- ・ 110 年前、医師であった伊東氏が別邸として建築、四方が明るく見渡せることから「四明荘」と名付けられた（ふすまの枠が額縁）。
- ・ 鯉が優雅に泳ぐ庭園の池には約 3000 トンの水が毎日湧き出ている、その水は側溝から有明海に流れるためあふれることは無い。
- ・ **茶室から見る景色は、座敷と庭園が一体となっている。ここでしか見られない独特の景観**であり、平成 26 年国の登録有形文化財になり人気の観光スポットに。



## ③ 江東寺・涅槃像…右写真

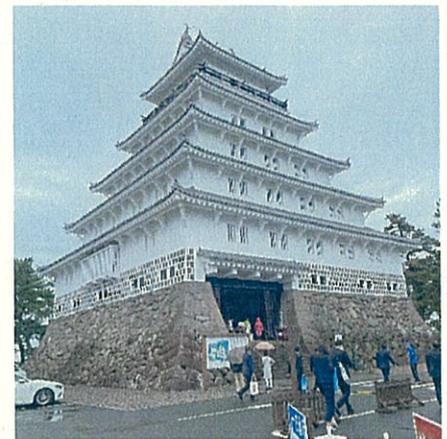
- ・ 松倉重政が島原城を竣工させると、その地を城下町の郊外に移し、新城主松倉重政はここを菩提寺と定め、江東寺と改められた。
- ・ **ねはん像は昭和 32 年に板倉重昌と松倉重政の霊を供養するために建立されたもので、身の丈 8.1m の鉄筋コンクリート造りのものとしては日本最大で、足の裏に大法輪の相（仏足石）が刻まれているのも最初とのこと。**



## 3. 城下めぐり

### ① 島原城…右写真

- ・ 1618 年からおよそ 7 年の歳月を費やして築いた城で **五層天守閣を中核に櫓を要所に配した壮麗な城**。
- ・ 島原の乱の猛攻や島原大變の地震や大津波にも耐えたものの明治に入り石垣とお堀だけを残し解体。
- ・ 昭和 32 年に **全国初の城跡公園に指定**され昭和 35 年西の櫓、**昭和 39 年には天守閣も再建**。
- ・ 現在の天守閣には、キリシタン資料並びに藩政時代の郷土資料、民俗資料等が展示されている。
- ・ お城の入口では、島原城七万石武将隊が案内はじめ、写真撮影のお手伝いや演武披露。



### ② 武家屋敷…右写真

- ・ 島原城築城の時、上士屋敷は場内に置かれたが、扶持取り 70 石以下の武士たちの徒士屋敷（武家屋敷）は外郭の西に接した場所に建設された。  
徒士屋敷の広さは 90 坪、家は 25 坪ですべて藁葺。
- ・ **武家屋敷街の中央に流れる清水**は、飲料水や生活用水に使われており、昔は疫病に対する消毒薬もなかったもので、川奉行を置き予防に努めたとのこと。
- ・ 島津藩では自給自足が奨励されており、梅、柑橘類、桃等の果物を植え、竹林があるところも。
- ・ **400 年以上、当時のたたずまいがそのままの形で残っているところが素晴らしい。**



## 4. その他

### ① 島原鉄道・大三東駅…右写真

- ・この一年余りでマクドナルドや麒麟レモンといった全国放送のCMロケに使われた日本で一番海に近い駅の一つ。
- ・訪問した日はあいにくの雨だったが、**観光客がカメラ片手に記念写真**を撮っている。
- ・撮影には島原鉄道が全面協力し列車も特別に仕立てて行われたとのこと。



## 5. 質疑応答…主なもの

- ・一年間の入込客数は？  
→コロナ前の入込客数は140万人弱、**コロナ禍の令和3年は約半分の64万人。**
- ・島原大変肥後迷惑とは？  
→**230年前に普賢岳が噴火し、眉山が山体崩壊**、大量の土砂が有明海に流れ込んだ結果、津波が熊本側に押し寄せた。(この津波は島原～熊本を何度も行き来)  
**島原は土砂と津波で1万人、熊本も津波で5千人の人が亡くなった。**
- ・四明荘の周りの住宅は当初からあったのか？  
→島原大変から100年以上が経ち、四明荘を建てた時点では周囲には何も無かった。
- ・島原の歴代城主は徳川や三河にゆかりの人物が多いが？  
→**有明海越しに九州が見渡せる要所**であり、**九州諸大名に対する目付け役**を担っていたためと考えられる。
- ・島原の乱で3万人以上の方が亡くなり、島原藩はどうやって維持できたのか？  
→**幕府が各藩に大規模な農民移住を命じて**徐々に人口は増加した。
- ・島原市は大三東駅はじめ、テレビ番組やCMでの露出度が高いように感じるが？  
→**ロケを誘致するたびに観光資源が増えるロケツーリズム**に力をいれており、シティプロモーションもそこを中心に進めている。

## 5. 所感

- ・今回、島原観光課の方に大きく3カ所、案内していただいたが、いずれも**その地域の持つ強み(湧水、島原城、大三東駅)**を最大限に活用し、**退屈せず**に歩いて回れる印象を受けた。
- ・湧水はさらさらの砂が舞いながら湧き出ているところを見せるのはもちろん、**色とりどりの鯉を泳がせることで水の透明感を際立たせて**おり、「鯉の泳ぐまち」を代名詞として、いたるところに鯉のぼりも飾っている。
- ・ここならではの**唯一無二の空間は四明荘**で、縁側に座って庭園を臨むと時を忘れる。岡崎市も**奥殿陣屋等が近い雰囲気を持つ**ので上手にプロモートできれば。
- ・**島原城はランドマークとして圧倒的な存在感**があり、岡崎城が周りのビルに埋もれていることから考えるとうらやましい限り。
- ・**武家屋敷も水路と相まって当時の雰囲気**がそのまま残っているところが素晴らしい。
- ・岡崎市も**いろいろな武器**はあるため、それらに**ストーリーを持たせてつなぎ**、点を線

にして**退屈せずに歩いて回れる**ウォーカブルなまちづくりを少しずつでも進められるといい。

- ・また、大河ドラマ「どうする家康」の盛り上がりを一過性にしないためにも、島原市の**ロケを積極的に誘致するロケツーリズム**を上手に真似ていきたい。

#### 【同行者の所感】

- ・島原まち歩きマップによる、島原城はじめ13の観光スポットを徒歩での移動時間約50分で巡れるのは、観光客にとって大変魅力的だ。

水の都らしく、湧水庭園四明荘などは、透き通った池に鯉の泳ぐ様は、大変癒される思いだ。

この観光スポットを当時の風情そのままに伝承しているのは素晴らしく、歴史語りびとによるガイドもわかりやすかった。今後の課題はやはり新しいガイドをいかに育てるかにあるようだ。

本市に於いてもガイドの育成は急務であろう。また観光地間の魅力ある移動手段の構築も必要であると感じた。

・今回の視察テーマは「歴史めぐり観光について」であったが、歴史のみに捕らわれることなく市域全体の観光スポットを巡らせる方がより合理的でもあるし、島原市でもそうであった。当方の視察テーマが歴史に振りすぎたきらいがあった様に感じた。然し、島原市の観光スポットは、その殆どが多少の差はあれ歴史に関係している。実際に、時間的な限りがある中、2～3箇所ほどしか現地視察は出来なかったが、水の都島原と呼ばれる由縁である湧水群や、歴史的資産である島原城、武家屋敷、寺社仏閣、ユネスコ世界ジオパーク、そして、フォトジェニックスポットである海に一番近い駅、大三東駅等、観光スポットは割と狭い範囲に散らばっていた。本市の観光事業はどうしても、家康公生誕の地としての歴史的資源に負うところは多いが、周辺の交通事情や宿泊施設等優位な点も多くある。観光資源の質と量、そして周辺環境を鑑みれば、まだまだ本市ではソフト面での施策は数多くあるように感じる。

今回の島原市訪問で改めて感じたことは、どこの自治体も戦国から江戸時代まで遡れば、何処かで岡崎、或いは、徳川家縁の譜代大名家、家臣団、三河武士へと繋がってくる。こうした点を強みと捉え、先ずは自治体間で繋がりが、そして、観光へと繋がりを広げていくことも考えられる。アフター大河を見据えても、本市は観光事業に関するポテンシャルはまだまだ高いものと考えられる。

- ・自然・歴史・湧水のまち、島原の風情あふれる城下町をゆっくりと散策するための「島原まち歩きマップ」を作製して歴史めぐり観光に力を入れている。

マップには15箇所の立ち寄りポイントが記載されていたが時間の都合で島原城、清流亭、湧水庭園四明荘、江東寺涅槃像、武家屋敷を視察した。マップの15箇所のまち歩きは1分～12分の間隔で見学ポイントが設定されていてコンパクトにまち歩きが出来るようになっている。まち中の観光ポイントをうまく活用している。

本市においても岡崎城や周辺の寺社仏閣や民間店舗、市有施設などを組み合わせたまち歩きや自転車移動での街中周遊を展開すると共に、岡崎全域を周遊する観光案内を展開してはと感じた。

- 平成 2 年の雲仙・普賢岳噴火による大火砕流により、壊滅的な被害を受けた島原の印象が強かったが、今回の視察において、山と海に挟まれた 83 km<sup>2</sup>の土地ではあるものの、島原の乱に象徴される、日本における、キリスト教伝来の聖地の一つとして、歴史的な資源が豊富な土地である事が理解できた。

島原の乱の原因ともなった、島原城は 7 万石であるにも関わらず、50 万石級の天守閣を持ち、立派なお城である。中に陳列された品々も、島原の乱の中心となった原城から出土された、隠れキリシタンの所持品が並び、この土地で起った史実を理解するのに大変貴重な展示物ばかりであった。

城主と民衆との確執が一度は島原の民衆を全滅させ、移民政策による復興という悲しい歴史が、現在の島原の根底にある事を知り、悲しく感じた。

現在の島原は湧水量、1 日 20 万 t を誇る、正に水のまちであり、湧水庭園四明荘を初め、湧水地が街のいたるところにあり、鯉が泳ぐ姿を各所で見られる。

また、市の政策により、ご城下が感じられる街並み保存にも力を入れ、約 300m に亘る武家屋敷跡は、現在も住民が住んでいる中で残されている。

見どころが多いが、交通の利便性は必ずしも良くなく、観光入込客数は年間 150 万人程度になっている。

温泉もあり、みどころが多い土地ではあるが、今後のインバウンド回復の波に乗って、どのような観光商品を開発していくかは、大きなカギになる。県内他市との連携ができると思いわれる。

本市よりも観光資源が豊富という印象が残った。

- 島原市はお城を中心にこじんまりして、いい意味、観光で回りやすい感じがした。そして、随所に溢れる湧水が水路を潤す景観が印象的だった。近年は“鯉の泳ぐまち”として注目を浴びているのも理解できた。湧水は、市内にある島原城や武家屋敷通りなどの歴史的建造物にも関係しており、城下町の風情を感じながら湧水を使用したコーヒーを提供するお店があると聞き、まちの特性を上手く観光に結び付けていると感じた。対照的に島原市と面積を比較して約 4.7 倍広い本市においては、観光の見どころが点在しており、いかに岡崎城に来ていただいた方々を、ほかの見どころに誘導していくのが肝心であると考えた。

# 政策調査視察調査報告書

報告者：廣重敦

視察日	令和5年4月26日(水)	視察地	佐賀県嬉野市
視察内容	嬉野温泉駅周辺整備について		
視察者	小木曾智洋、加藤義幸、鈴木静男、磯部亮次、酒井正一、廣重敦		

視察目的：令和4年9月23日に嬉野市唯一の鉄道駅として「嬉野温泉駅」が開業。

100年の念願と言われる駅の開業を契機に観光地としての魅力を向上させ、官民一体で駅周辺整備事業に取り組んでこられた。

その状況とこれからの計画を伺い、JR岡崎駅、名鉄東岡崎駅の周辺開発の参考にしていく。

開催場所：まるくアイズ（観光・交流施設）

説明者：村上市長、高橋副議長、観光経済課 倉繁参事 井伊係長

タイトル：『官民連携による嬉野温泉駅周辺整備について』



## 1. 嬉野市の概要

- ・平成18年に嬉野町と塩田町が新設合併し、佐賀県で9番目の市として誕生。
- ・佐賀県西部に位置し、面積は126.41㎢、令和4年3月末時点での人口は25,187人。
- ・日本三大「美肌の湯」として知られる嬉野温泉はナトリウムを多く含む重曹泉で、独特のぬるぬる、すべすべ感が特徴。
- ・温泉水で特製の豆腐をゆで、白濁した頃に薬味を入れて味わう温泉湯豆腐が名物。
- ・また、嬉野茶は全国の品評会でも数々の受賞歴を持ち、九州でも指折りの銘茶。
- ・陶磁器も個性あふれる肥前吉田焼、生活に必要な日用品を量産する志田焼が有名。

## 2. 嬉野温泉駅周辺整備

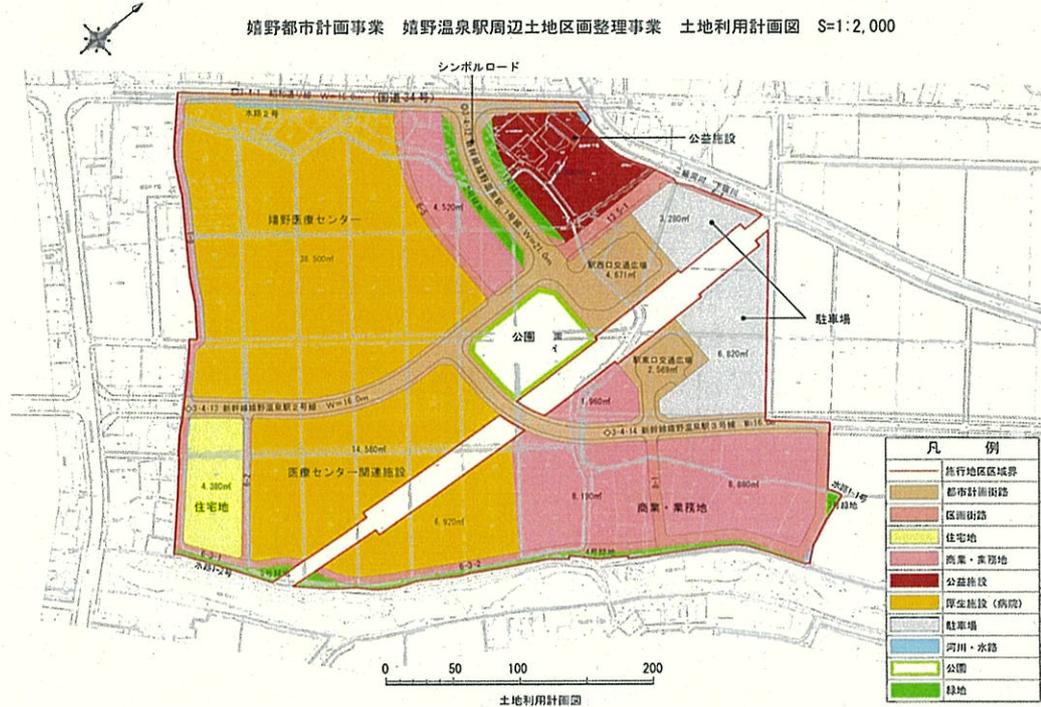
### ①嬉野温泉駅周辺整備の概要について

- ・公民連携を基礎とし、公共が整備する公園や観光交流センター等と民間事業者が整備する各施設で相乗効果を生み出す。
- ・公園とLocal Food Labを集客や賑わいの核として、テーマの異なる5つのゾーンを設定。各ゾーンの回遊性を高めつつ、「創造→発信→体験」のサイクルを増幅させる。
- ・地域資源を生かして新たな魅力を創造し、公園を活用したイベントの開催やメディアで発信。そして地域住民や観光客がそれらを体験でき、さらにまち全体へ波及させる。



## ②事業開始の経緯、背景について

- ・新幹線西九州ルートへの整備が決まり、嬉野市内初の鉄道駅が誕生することになり、駅周辺土地区画整理事業がスタート。
- ・平成26年に佐賀大学三島教授を委員長とするまちづくり委員会を設置。
- ・新駅周辺に必要な機能、駅前にふさわしい景観デザイン、商店街や温泉街との連携などを考え、駅周辺整備に反映する形で提案。



## ③事業の特長、特色について

**①公共交通を利用する個人客がスムーズに旅館に行ける交通拠点機能**

観光スポットを巡回するバス

レンタサイクル

**②嬉野や周辺の情報を得ることができるインフォメーション機能**

観光案内所

展示コーナー

**③嬉野の魅力を伝え、観光拠点ともなる飲食・物販・体験機能**

新鮮な地元産品を選べるマルシェ

個性的な品ぞろえのセレクトショップ

ゆったり過ごせるカフェ

入浴施設

④交流を通じて嬉野をアピールする情報発信機能



屋外イベント



屋内イベント



レセプション



研修・発表会

⑤充実したバリアフリー機能（以上を支える基本的機能として）

- ・スムーズな乗降が可能な交通施設
- ・誰もが使いやすいトイレ・駐車場等
- ・外国人でもわかりやすいピクトグラム など

- ・駅周辺整備は全て市が行い、定期借地利用は民間で実施。



④事業の効果、実績について

- ・この3年間、コロナ禍で休業することもあった旅館業も、**現在ではほぼコロナ前の水準に戻り、新幹線効果で長崎方面からのお客様も増加。**
- ・まだ1年経過していないこともあり、これからマリオット系列ホテル、JRホテルが開業予定で特に前者（右写真）は積水ハウスとTrip Base（道の駅プロジェクト）を展開しており、**宿泊のみの提供**で隣接する道の駅「うれしのまるく」はじめ地元飲食店の期待も大きい。



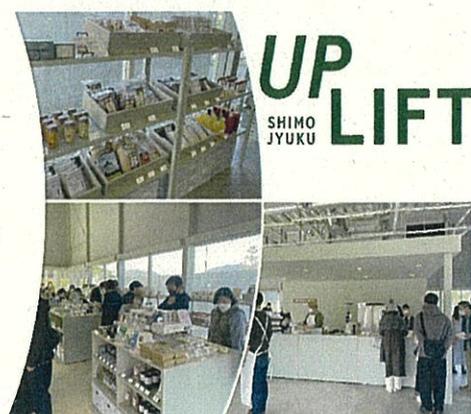
## 道の駅「うれしのまるく」



## 民間施設 UP LIFT

### UP LIFT 飲食物販

隆起、高揚、向上  
嬉野・佐賀のものを中心  
に飲食や物産を展開  
市内酪農家が運営する  
カフェ



### ⑤市民の声（評価・要望）について

- ・嬉野医療センターもここに移転したことから、バス路線の追加等、**ここを起点とする交通ネットワークに関する要望**が多い。
- ・宿泊客の行動が旅館内で完結してしまう。歡樂街的なイメージでなく、**まち並み景観として魅力のある立ち寄りポイント**が市内にもっと欲しい。
- ・評価に関しては、まだ始まったばかりであり、これからといったところ。

### ⑥現在の課題、今後の展開について

- ・有田や伊万里といった**近隣の観光地に行く人たちの起点をここにしたい**が、観光周遊バスのようなアクセス手段がまだ無い。
- ・コンパクトなまちの利点を活かし、**駅から宿まで手ぶらで歩いて回れる手ぶら観光を推進**していくのと併せて、自動運転でのモビリティサービスも実証中。
- ・駅から人を流すだけでなく、**情報も発信**していくようにする。
- ・新幹線駅という100年の念願をスタートとし、次の100年の念願を描く。
- ・新幹線の開通をきっかけに**移住、定住、そこに向けた各種誘致**を進めていきたい。



## 3. 質疑応答…主なもの

- ・まちづくり委員会にJRも入っていたのか？  
→委員会には入っていないが、オブザーバーとして出席してもらうことはあった。
- ・定期借地を導入した理由は？  
→**民間を積極活用**するため。定期借地に関しては岡崎市の事例も学ばせてもらった。
- ・ホテル誘致については定期借地では簡単でないと思うが？  
→**ホテルに関しては70年の一般定期借地権**を設定。それ以外の民間業者は22年。
- ・交流人口はどれくらいになるのか？  
→コロナ前は年間200万人、コロナ禍で100~150万人にまで落ち込んだが、元の**200万人に戻りつつある**。
- ・新幹線の駅の乗降客数はどれくらいなのか？

- 市長はじめ JR に要請しているが**数字を出してくれない**。
- ・(乗降客数の公表に関して) まだ年間データとしては無いと思うが、**いずれ他の新幹線駅同様定期公表することになるのか**たくなに断ると逆に邪推してしまうが？
  - 我々にも隠す理由が無いと思うのでなぜだかわからない。
- ・「うれしのまるく」の「まるく」の意味は？
  - ドイツ語で市場を表す言葉。(フランス語のマルシェにあたる)
- ・温泉街からはどういう期待があるのか？
  - 海外から来る人もターゲットにこの駅周辺が人を流す場所**になって欲しい。

#### 4. 所感

- ・今回の嬉野温泉駅周辺整備事業をみると、まちづくり委員会がきちんと成果を出しており、**100年の念願に向け3年間議論の過程がオープンにされて進められてきたのが**大きい気がする。
- ・平成18年合併当初は3万人居た人口が現在では2万5千人にまで減少しているため今回の新幹線嬉野温泉駅周辺整備事業をきっかけに、**人口減に歯止めをかけたい**との思いは、市長始め大変強い。
- ・嬉野温泉駅から温泉街までは1.5kmという微妙な距離だが、ここをスムーズに結ぶ、上手に立ち寄らせることが当面の課題であり、**手荷物配送サービスやシェアサイクルを活用した「手ぶら観光」**を進めつつ、パーソナルモビリティや自動運転車両の導入に取り組んでおり、頼もしい限り。
- ・岡崎市も東岡崎から大河ドラマ館の移動補助としてC+walkの貸出しを行っているが河川敷のみであり、回遊を促すためには**宿を含め「手ぶら観光」のようなコンセプト**も必要と考える。
- ・**70年定期借地**でマリOTT系ホテル、JRホテルという**優良ホテルを誘致**したことを見ると岡崎市としても学ぶべきところはまだまだある。
- ・観光はそこだけの点で考えると一過性で終わるし、広がりも見せない。  
有田や伊万里といった近隣との周遊バスも検討中ということであるが、**新規ホテルに滞在**してもらうためにも、**そこから便利にアクセス出来るという環境**は早急に整える必要があると感じた。
- ・西九州新幹線の開通で長崎から観光に来られる方が増えていることに加えて、ここで**湯治しながら長崎観光に行けるようなハブ**になる可能性も。
- ・愛知県もジブリパークはじめ豊富な観光コンテンツがあるため、岡崎市が周遊ルートに入るのはもちろん、将来は名古屋以東の愛知観光のハブになれるよう、**アクセス性を活かした滞在型ホテル誘致**が求められる。

#### 【同行者の所感】

- ・日本三大美肌の湯として栄えた嬉野温泉は、今まで鉄道のアクセスがなく西九州新幹線開業とともに、新しいアクセス法が増えた形だ。嬉野温泉駅は、周囲に嬉野医療センター、看護学校、観光案内所、道の駅等が整備されているが、観光地の玄関口としてはこれからの開発に期待が寄せられる。温泉街まで少し距離があり、モビリティサービス等考えているようだがアクセス方法も課題の一つだ。駅前にマリOTT系の

ホテルの進出が決まっており、温泉街との共存も課題であろう。駅前の開発が進めば、やはり駅前から温泉街・商店街へいかに足を運んでもらうかが最大の課題になるであろう。

いずれにしても、ほとんど何も描かれていないキャンバスに自由に絵を書くことができるのは、夢があり魅力的である。

岡崎市は今後東岡崎駅第 2 期工事が始まり令和 11 年度完成予定と聞いているので、完成後は市民及び観光客に愛される運営等を期待する。

- ・ 駅周辺整備は、2022.9.23 に開業し西九州新幹線の新駅である嬉野温泉駅周辺整備であり、嬉野市の新たな玄関口としての整備と併せ、温泉街とを結ぶネットワークとしての一翼も担っている。主な施設としては、道の駅「うれしのまるく」、民間整備による直売所、ホテル、国による情報提供施設、その他観光交流施設として手湯、足湯等が設置されている。又、道の駅「うれしのまるく」は、従来型の道の駅である産直があって、飲食できる店があつたと、目的地としての設定とは大きく異なり、交通結節点である新駅を起点としたスタートポイントであり、情報発信をメインとして人流の創造や市内産業の振興が期待されている。従って、産直は別施設に委ね、インフォメーションコーナーやワーキングスペース等が充実している。ただ、新幹線駅の乗降客数が絶対的に少なく、現状の一部開業のままでは期待される効果を得ることは疑問である。早期の全線開業が望まれる。

然し、嬉野市が道の駅に与えた役割は、本市に於ける QURUWA プロジェクトに於いて大いに参考にできると考える。現在整備中の東岡崎駅周辺、或いは、現在頓挫しているコンベンション施設設置予定地、桜城橋北詰広場等へ、うれしのまるくと同様の役割を与えられる施設の設置等が有効と考える。

- ・ 令和 4 年 9 月 23 日に西九州新幹線がリレー方式で武雄温泉・長崎間が開業した。それに伴い嬉野市に嬉野温泉駅が整備開設された。嬉野温泉駅から温泉街までは 1.5 km の距離だが、この間を如何にスムーズに観光客に立ち寄らせることが当面の課題であり、手荷物配送サービスやシェアサイクルを活用した「手ぶら観光」を進めつつ、パーソナルモビリティや自動運転車両の導入に取り組んでいる。本市も東岡崎から乙川リバーフロント地区や岡崎城大河ドラマ館への回遊を促すためには「手ぶら観光」のような手荷物レスへの施策も必要と考える。嬉野温泉駅周辺整備は、公民連携を基礎とし、公共が整備する公園や観光交流センター等と民間事業者が整備する各施設で相乗効果を生み出している。整理事業まちづくり委員会を設置して新駅周辺に必要な機能、駅前にふさわしい景観やデザイン、商店街や温泉街との連携などを考え、駅周辺整備に反映する形での提案をうけて整備をする手法は的確であり本市も東岡崎駅周辺の整備に当たっては大いに参考とすべきである。

- ・ 鉄道が全く通ってなかった街に、突如新幹線の駅ができた。嬉野市の今である。市街化調整区域であった駅の整備地域を市街化編入して、駅前を開発整備していると

ころである。嬉野温泉は美人の湯として、九州でも有名な温泉の一つである。もともと温泉地に来る交流人口によって町が栄えてきたと思われる。

今回の嬉野温泉駅の開業で、中心部から外れたところに、新たな拠点ができることになった。都市部へのアクセスと新たな駅前の賑わいの創出が課題となっている。新たに区画整理が行われた面積は 14.6ha と広大な土地である。民間との連携によるまちづくり委員会を立ち上げ、魅力創出のプランを練ってくと同時に、古くなった医療センターを新たに駅前に整備した。駅前広場の一角には道の駅ができ、情報発信機能を重視したものとなり、商業施設は、民間投資に期待する形となった。また、観光文化交流センターを開設し、市が運営する形をとっている。民間業者の進出もほぼ埋まり、これから建設も始まり、駅前の賑わいが広がりを見せる形となる。駅前が、観光のスタート位置となるため、交流センターでは、1 コインによる宿泊施設までの手荷物配送サービスを行い、シェアサイクルの利用促進を目指している。また、温泉街までの足として、今後は自動運転バスの利用を推進することとしている。民間業者との土地利用の仕方について、定期借地契約を締結するようで、本市にも先行事例の中で問い合わせをされたとの事であった。

新幹線の駅ができることは、大変な事であると実感した。しかし、鉄道そのものが無かったところにいきなり新幹線の駅ができるということは、1000年の計にも値する。地元都市では、いかに有効に活用していくかを丁寧に検討し、進めているように伺える。しかしながら、駅前に医療センターを移設したことは、地元にとっては大変有効に感じられる。利用者が高齢者という事を鑑みるとアクセスについて充実させる必要があるものの、周辺部というよりも駅前の拠点にアクセスを図ると考えれば予算をかけていく意味は十二分にあると言える。数年後、整備が整った頃に、ぜひ再度訪れたいと思った次第である。

- ・嬉野温泉駅は、2022 年秋に開業した西九州新幹線の駅で、嬉野市に初めて鉄道が通ったことになり、駅のデザインは、地元の意見を取り入れて「湯どころの趣のある駅」として作られ、駅前には、「うれしの まるく」という道の駅や観光・交流施設、公園などが整備され、カフェとセレクトショップが開業し、ホテルも建設中であった。また周辺には嬉野医療センターや嬉野市役所などがあり、これらの施設と連携して、駅前に多様な人々が集まるような仕組みやイベントを企画していくとのことである。コンセプトとして、地域との協力を頂きながら、共存共栄を図るとの事であった。本市においても、東岡崎駅周辺やアウトレット事業が予定されている本宿駅周辺なども、魅力や特色をアピールする施設やサービスを充実させることが重要であると感じた。